

第3話 トップジービーサ篇

サンタクロースの ピンチヒッター！

1

お元気ですか。いよいよ本格的な冬がやって来ましたね。北風がびゅうびゅう吹いて、丘の上の風車はパタパタと大忙しです。一段と冷え込む朝は、二度寝をしたくてたまらなくなります。でも、寝坊ばかりもしてられないので、近所に住んでいる鳥たちに自覚まし係をお願いしています。

この島に来て5回目の冬を迎えます。今年もあと少しで終わりますね。どんな1年でしたか？ 私は春に描きはじめた大きな風景画を完成させました。もう少し上手くなったら、この図書館で個展を開きたいな。

12月といえば、クリスマス。実は、この島にはサンタクロースを手伝った2匹のヤギがいるんです。30年前のイブの日、おなかを壊したトナカイのピンチヒッターとして、ピンザおじさんとヒージャおじさんがソリを引っ張ったんです……

2

城山のふもとにあるガジュマルの下で、2匹のヤギがオセロをしています。白ヤギのピンザおじさんと、黒ヤギのヒージャおじさんです。2匹は風の島の郵便配達員で、ピンザおじさんは島の西側、ヒージャおじさんは島の東側の配達を担当しています。

渡り鳥がガジュマルに郵便物を届けると、インシヨドリのピビ次郎が自慢の歌声を響かせます。キュビリリ・ビーと鳴いたらピンザおじさん、キュビリリ・キュービーと鳴いたらヒージャおじさんの番です。しかし、年のせいか、ここどころ2匹は「ビー」と「キュービー」を聞き間違えてしまいます。「おいビビ次郎！ もっとハッキリ鳴けよ！」と2匹は抗議しますが、ピビ次郎は歌に自信があるので、「ビーとキュービーは全然違うよ！」と言い返します。

仕事がないとき、2匹はお酒を飲みながらオセロをします。50年あまりの付き合いなので、相手のクセや弱点は知り尽くしています。ですが、酔っぱらっているのも、いつも互角の勝負が繰り広げられます。島のみんなからは「本当によく飽きないよね」、「不思議だよね～」とうわさされています。

3

今では仲よくオセロを楽しむ2匹ですが、若い頃は絶交していた時期がありました。

30年前、郵便屋さんのアースじいさんが引退することになり、後継者を探していました。そこで手を挙げたヒージャおじさんは、ヤギ界のアイドル・メイ子さんへのプロポーズ権をめぐる、ピンザおじさんに挑戦状を叩きつけたのでした。「どちらが長く紙を食べないでいられるか勝負しようじゃないか」

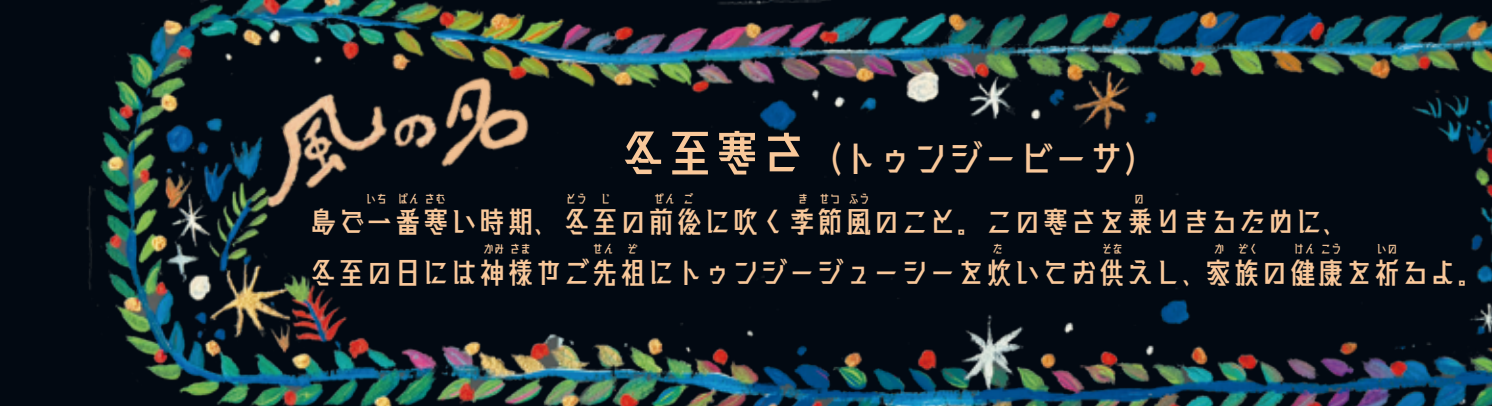
「よし！ 言い訳なしの真剣勝負だ！」

こうして2匹は、島の東と西に分かれて郵便配達をはじめました。手紙の中にはおいしそうな紙がたくさんあって、配達する度に心を揺さぶられました。高級な和紙を見た日には、ジュルジュルとよだれが止まりませんでしたが、最後にはメイ子さんのキュートな笑顔が浮かんで、ぶるぶると首をふるのでした。

1週間がたち、2週間がたち、3週間がたっても、決着はつきませんでした。しかし、ある日、ピビ次郎の父親のビビ太郎が手紙を甘がみしているヒージャおじさんを目撃しました。この一報を聞いたピンザおじさんは勝利宣言をしましたが、ヒージャおじさんは「かんだけど食べてはいない！」と反論して、小競り合いは大ゲンカへと発展しました。

「私、ケンカばかりしているヤギって嫌い！」

追い打ちをかけるようなメイ子さんの言葉もあった、2匹の間にはますます険悪なムードが漂うようになりました。そして、そのまま、絶交してしまったのでした。



4

それから半年ほどたった12月の午後、困った顔のサンタクロースが風の島にやって来ました。話によると、キノコを食べておなかを壊したトナカイに代わって、残り千軒の家と一緒に回ってくれる助っ人を探しているということでした。相談を受けたメイ子さんは、すぐに「ピンザとヒージャがいるわ！」と答えました。

メイ子さんの紹介を断ることができず、2匹は渋々サンタクロースを手伝うことにしました。しかし、ソリを引いて宙に浮かぶところまでよかったのですが、足並みがそろわずにソリはくるくると回転しました。目を回したサンタクロースは、ゴホンと咳の一つして、言いました。

「このソリは2匹が協力しないとうまく進まないんだ。いいかい？ クリスマスは相手のことを思い

やる気持ちが必要なんだ。プレゼントを待っている子どもたちのことを考えてみてごらん」

2匹は目を合わせました。そして、自分がプレゼントを楽しみにしていた子どもの頃を思い出しました。最初はブツサと文句を言っていたのですが、そのうち足並みがそろうようになり、1軒ずつ回ってプレゼントを配っているうちに、誇らしい気持ちになっていきました。



5

プレゼントを配り終えたあと、サンタクロースと2匹は風の島に帰って来りました。

「ありがとう。本当に助かったよ。お礼として、君たちには特別なプレゼントをあげよう」

サンタクロースはガジュマルの枝にヤドリギの飾りをかけて、メイ子さんにコンソソッと耳打ちをしました。メイ子さんは少し顔を赤らめて、2匹のほっぺにチュチュッと短いキスをしました。「ホッホッホー！ メリークリスマス！」

笑いながら去って行くサンタクロースを見送ったあと、ピンザおじさんとヒージャおじさんはうれしさのあまり島中を駆け回りました。しかし、ガジュマルの下に帰ってきたとき、メイ子さんから衝撃発言が飛び出しました。

「私ね、灰色ヤギのゴートさんと結婚するの。結婚式にはピンザとヒージャも呼ぶわ」

ガーン！ 膝から崩れ落ちた2匹は、その日から酒を飲みながらオセロの勝負をするようになりました。

今でも、風の島の手紙には時々ヤギの菌形がついているそうです。

